

執筆要綱

1 総則

A 原稿の形態など

- 1) 原則としてワープロ原稿とする（A4、横書き、30字×26行/頁）。
- 2) 分量として、上記のフォーマットで20枚から25枚程度。
- 3) 原稿はワードファイル（.doc 或いは.docx）或いはリッチテキストファイル（.rtf）にして添付ファイルで編集委員に送る。
- 4) その際、pdf ファイルを必ず添付する。pdf 化できない場合は、プリントアウト原稿を編集委員に郵送する。

B 使用漢字・数字・句読点など

- 1) 固有名詞・術語以外の表記は常用漢字・現代かなづかいを原則とする。
- 2) 数字表記は次の区分に従う。
 - a) 聖書箇所での表記は半角の算用（アラビア）数字とする（なお下記3・Aも参照）
 - b) 通常の数詞表記もこれに同じとする。
 - c) 日本語として熟している表現あるいは術語は漢数字とする。
【例】七十人訳、五割、一人、二人三脚、十二弟子

C 外国語表記

英独仏以外のギリシャ語、ヘブライ語等の原語表記・原文引用は必要最小限にとどめる。ローマ字転写で用いる場合の転写法は通則に従い、長音やアクセント記号などを付す。

D 外国語の片仮名表記

- 1) 一般に通用している範囲でできるだけ原音に近いと思われる表記とする。
- 2) 「バビブベボ」と「ヴァヴィヴヴェヴォ」は区別して用いる。
- 3) ギリシア語・ラテン語などの片仮名表記の長音（ー）は可能な範囲で省略する。
【例】ソークラテース → ソクラテス

E 文章表現

- 1) 文体は「である」調とする（「です・ます」調は用いない）。
- 2) 常用漢字・現代かなづかいを原則とする。接続詞、副詞、助動詞などは、なるべく漢字化しない。
- 3) 代名詞（私、彼、彼女）は漢字とするが「彼等」などは用いない。
- 4) 反復記号のうち、仮名文字の反復記号（ゝゞ）は用いず、漢字の反復記号（々）は用いる。
例： あゝ → ああ、人人 → 人々
- 5) ルビは原則として用いない。

2 表題・見出し

A 字体の級数は本文と同じで構わない（編集・印刷段階で調整する）。

B 表題について

タイトル、サブタイトル、執筆者名を日本語と英語（あるいは独語か仏語）で明記する。

C 中見出しの分割のための記号使用は必ず次のオーダーに従う。

見出しレベル 1 : 1、2、3…… (半角) ※センタリングし、章題を一文字空けて記入する。

見出しレベル 2 : 1.1、1.2、…… 2.1、2.2……3.1、3.2

見出しレベル 3 : 1.1.1、1.1.2、……1.2.1、1.2.2、……2.1.1、2.1.2、……3.1.1、3.1.2、……3.2.1、3.2.2…

※ 見出しレベル 3 を限度とする。

D 箇条書きには、上記オーダーのいずれかを問わず、「・」 (中黒) を用いる。

3 聖書文書・箇所を表記

A 全記・略記の別

1) 本文においては原則として、日本聖書学研究所が定めた通りの各文書名 (次のBC参照) を全記し、章・節の語を付す。

[例] 創世記 1 章 15 節 ※ 上記 1・B・2)・a) も参照

2) 本文であっても括弧内に表記する場合は、文書名を略記し (次のBC参照)、章と節の区切りはコロン

3) 文書と文書の区切りは句点 (、)、章と節の区切りは半角のコロン (:)、章と章の区切りは半角のセミコロン (;)、同じ章の節の区切りは半角のピリオド (.) で表示する。

[例] (創 1:15; 2:27、民 3:1.9)

※略記と章の間にはスペースを入れない。コロンの後にはスペースを入れない。セミコロンの後には半角スペースを入れる。ピリオドの後にはスペースを入れない。

4) 注においては必ず上記 2) に準じて略号表記する。

B 旧約・新約聖書 (正典) 文書の全記と略記

『聖書学論集』に採用の、従来通りの表記

C 外典・偽典、使徒教父文書、フィロン、ヨセフス等

『旧約・新約聖書大事典』、教文館、1989年、14-16頁に準ずる。

D ナグ・ハマディ文書

荒井献・大貫隆 (編集) 『ナグ・ハマディ文書——グノーシスの神話 1~4』 (岩波書店、1997-8年) 及び荒井献・大貫隆 (編集) 『ナグ・ハマディ文書・チャコス文書——グノーシスの変容』 (岩波書店、2010年) に準拠する。

E 死海文書

(近日中に配布する一覧表に従う)

4 ユダヤ教 (ラビ文書)・西洋 (ギリシア・ローマ) 古典関係の文書の表記

原則として、それぞれ最も一般的な表記法に従って表記する。しかし、読者の便宜を考えて、過度の省略表記は避ける。片仮名あるいは日本語訳で表記する場合、原典へアクセスしようとする読者の便宜を考えて、注などに正確な欧文表記を付記する。

5 本文および注の地の文で用いるその他の記号など

A 引用・強調

- 1) 地の文で引用する場合は「」で囲う。引用文の後に出典名を記す場合には、「」の外に () で出典名を補う。
- 2) 長い引用の場合には、前後一行を空けて全角 2 文字インデント下げで始める。この場合、「」は用いない。出典名を記す場合には、() で出典名を補う。
- 3) 強調を必要とする語には、下線で指示する。校正ゲラで適当な形式に変換される。

B 人名

- 1) 欧米系研究者の名前は片仮名表記し、初出箇所に括弧で、あるいは注に当該の研究文献を表記するのと合わせて欧文の原綴を全記する。
- 2) 上記片仮名表記の場合に、同名異人の間の混乱が生じ得るような場合には、終始ファーストネームのイニシャルをローマ字で入れる。

[例] W・H・シュミット (Schmidt)、A・シュミット (Schmitt)、(Schmitt)、R・シュミット (Schmitt)、H・シュミート (Schmid)

ただし、ハイフンによる 2 重名の場合は、ピリオドを用いる。[例] H・C.シュミット

C () 内の年代表記

紀元前 → 前 587

紀元後 → 後 70

紀元前後にわたる場合 → 前 4-後 30 (ハイフンは半角)

年代不祥 → ?-後 137? (ハイフンは半角)

D 注の記号

編集の便のため、本文の注番号に蛍光ペン機能などを用い、見つけやすいようにする。

6 参考文献 (単行本・論文の表記)

A 邦文

1) 単行本の場合

a) 初出 → 著者名 (全記) 『書名』 [(シリーズ名)、] 発行所、初版発行年 (西暦)、○○○頁 (参照)。

原著者名 (全記) 『書名』 [(シリーズ名)、] 訳者名、発行所、初版発行年 (西暦)、○○○頁 (参照) (原著情報、下記B参照)。

b) 再指示 → 前掲書、○○○頁 (参照)。

2) 論文の場合

a) 初出 → 執筆者名 (全記録) 「論文名」『所収単行本・専門誌名』○○巻○○号、発行所、発行年 (西暦)、○○○-○○○頁所収、とくに○○○頁 (参照)。

b) 単行本・辞典・祝賀論文集などに所収のもの

執筆者名 論文名 (括弧内は → 上記の a) に準じて表記)。

c) 再指示 → 前掲論文、○○○頁 (参照)。

B 欧文

1) 単行本の場合

a) 初出

著者名または編集者名 (ed./Hg./Hgg.), 書名 (シリーズ名の略号表記、通巻番号), vol.○○ (英)/tom.○○ (仏) /Bd.○○ (独), 版数, 刊行地 発行年(西暦), p.○○○/pp.○○○-○○○ (英仏語) 参照 または S.○○○/S.○○○-○○○/Sp.○○○ (独語) 参照。

[例 1] G. Theissen, Studien zur Soziologie des Urchristentums (WUNT 19), 3. Aufl., Tübingen 1989, S. 100-102 参照。

[例 2] J. M. Robinson (ed.), **The Nag Hammadi Library in English**, 3.ed., Leiden/New York/Köln 1988, pp. 100-102 参照。

b) 再指示

i) 必要に応じて著者名 (片仮名または原綴), op.cit., p. ○○○/pp. ○○○-○○○/S. ○○○/S. ○○○-○○○/Sp. ○○○参照。

ii) 直前の注で指示したのと同一文献の同一箇所への指示 → *ibid.*

iii) *op.cit./ibid.* とともに、文頭に立つ場合も第一文字の大文字表記はしない。

iv) *loc.cit.*は指示先が曖昧になるので避ける。

v) 同一著者の相異なる複数の著書が言及・参照されている場合には、不用意に *op. cit./ibid.* を用いず、必要に応じてそのつど該当する書名 (略記で可) を再表記する。

2) 論文の場合

a) 初出

i) 専門誌などに所収のもの

執筆者名, 論文名, in: 所収専門誌名 (略号表記), 巻・号数 (○○○○年), pp./S./Sp. ○○○-○○○, とくに p./S./Sp.○○○参照。

[例] K.Rudolph, Gnosis und Gnostizismus. Ein Forschungsbericht, ThR 34 (1969), S. 121-175 参照。

ii) 単行本・辞典・祝賀論文集などに所収のもの

執筆者名, 論文名, in: → 以下、上記 6・B・1) ・a) ・[例 2] に準じて表記

[例] R.van den Broek, Autogenes and Adam. The Mythological Structure of the Apocryphon of John, in: M. Krause (Hg.), Gnosis and Gnosticism. Papers read at the Eighth International Conference on Patristic Studies, Oxford, September 3rd-8th 1979 (NHS XVII), Leiden 1981, pp. 16-25.

b) 再指示上記欧文単行本への再指示の場合 6・B・1) ・b) に準ずる。

ii) 但し、*op.cit./ibid.*はイタリックにしない。

3) 欧文専門誌・辞典などの略号

原則として S. M. Schwertner (Hg.), IATG2=Internationales Abkuerzungsverzeichnis fuer Theologie und Grenzgebiete, 2. Aufl., Berlin 1992 に準ずる。